



MINATO TOKYO

Bulletin

みなと
ユネスコ

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/KIMITADA MIWA PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL・FAX 03 (3434) 2233 発行人/三輪公忠

2010年3月19日発行 第119号

目次

P1 巻頭言「宗教が政治を先導する？」	p10 新年懇親会
P2 国際理解講演会「垣間見た日本の中東外交の裏側」	p11 ユネスコの世界遺産とグルジア/世界寺子屋運動
P6 国際理解講演会「すべての人に食べ物を」	p12 「ためしてガッテン」に出演して/「イラン・リストラン」続報
P8 デイブ・ロッツ・レクチャー「日本の文化外交とソフトパワー」	P13 MUA サロン「釣りの世界へご案内」
P9 世界の味文化紹介「ブラジルの家庭料理」	P14 事務局便り

宗教が政治を先導する？

港ユネスコ協会会長 三輪公忠

キリスト教がアジアとアフリカで爆発的に信者を獲得しているという。この現象は「バイブル・ディプロマシー」、つまり聖書外交と呼ばれている。この情報は防衛研究所の出版物に書かれていた¹。いろいろなことを思い起こさせた。

敗戦直後、占領軍と共にアメリカからは誰よりも先に、たくさんの宣教師が日本にはいつてきた。キリストの福音を述べ伝え、日本人の心にキリストの愛と平和を抱かせ、魂の救済に導くのに絶好のチャンスと思われていたのだ。真っ先に広島に行きたかったが、日本占領の総司令官マッカーサー元帥は、それを許さなかった。戦争中も日本に留まっていた反ヒトラーのドイツ人宣教師は広島で被爆していた。東京からも彼らの仲間のカトリックの聖職者は広島入りを許された。

銀座の大通りでは道行く人に聖書が無料でくばられた。ブルーの人造皮革で美しく装丁された名刺サイズの新約聖書を私ももらった。このミニ聖書は文明であり新世界であった。あの体験から考えると、防衛研究所の報告の意味も深くわかる。やはり「文明」であり「救済」への道筋と理解されているのだろう。

そもそも「宗教」とはどういうことを言うのか。アメリカの大学で宗教とは人間と神の関係であると学んだ。日本語の辞典では超越者に対する信仰をさすとしている。「関係」と「信仰」の差異は何か。「関係」は両方向をいみする。それに対し「信仰」は一方方向ではないか。人間から神へ、神から人間へと、両方向ということは、信仰に関係なく、神の働きは人間に及んでいる。日本語の辞典の説明は、超越者の存在を事実として認めていない立場のようである。「鯛の頭も信心から」のたとえのように。

西洋人と彼らの理解できる言語で日本人の宗教について論じ合うことのできた近代日本の代表者の一人は新渡戸稲造であった。キリスト教だけが正しい倫理観を人間に与えることができると考えている西洋の知識人の問いに対し、新渡戸は『武士道、日本の魂』の著述でこたえた。超越的の神なしでも、社会的存在として身を律することのできる日本人の倫理観を解析したのである。

さて、はじめに立ち返って、「宗教が政治をリードする」という命題についてコメントしたい。こう主張したのはアメリカの全国福音派連合の幹部牧師である。

ブッシュ前大統領はイスラムのイラクに兵を進める時、正義の「十字軍」と口走って物議をかもした。大統領が三軍の長であるという明快なシビリアンコントロールが確立しているアメリカの大統領制のもとであるために、これは大統領に固有の権限の行使であって当然のことと思ひ、この牧師のように必ずしも宗教が政治をリードしたと捉らえるものはあまりいなかったのかも知れない。しかしブッシュ大統領はキリスト教原理主義に「ボーンアゲイン」した改心信徒である。

テキサス知事であった時ブッシュは、州民のために一年のうちのある特定の日をキリストの歩んだ道を思い起こす日と定めたりしていたのである。まさに宗教が政治をリードしていたのである。アメリカの国益達成を助ける対外的道筋をスムーズに用意してくれるのが「バイブル・ディプロマシー」という事になるのだろう。 (2010・2・16)

¹ 防衛研究所『防衛戦略研究会議 報告書』(平成21年12月)、4頁。

垣間見た日本の中東外交の裏側

—39 年間の外務省勤務を終えて—

日時：2009 年 11 月 26 日(木) 18:30~20:30

会場：港区立生涯学習センター305 号室

講師：塩尻 宏 氏 元駐リビア大使 (財) 中東調査会 常任理事

70 年代に始まった資源外交によって、わが国は中東産油国への関心を高めました。その後、国際社会における中東地域の存在感の高まりによって、わが国の対中東政策も質的な変化を迫られる状況となりました。今回は、わが国の中東外交の変遷と、それを支える外務省の体制および舞台裏の動きなどについて、外務省中東専門家のお一人であられた大使が生々しい貴重なご体験談をお話し下さいました。

複雑な中東地域、中東問題などへの理解を深めるための良い機会となりました。



講師ご経歴

大阪生れ。1967 年 3 月大阪外国語大学アラビア語学科卒業、4 月外務省入省。以後、在エジプト大使館広報文化センター所長、在ボストン総領事館領事、経済協力局技術協力課企画官、近東アフリカ局中近東第二課地域調整官、欧亜局新独立国家室長、在ドバイ総領事を歴任。2003 年駐リビア特命全権大使、2006 年 4 月退官。同年 6 月より現職。

1. 外務省について

☆ 「外務省」は明治 18 年(1885 年)の「内閣制度」によって創設された省で、日本の政治機構の中では一番古いものの 1 つ。年間予算は約 6700 億円 (平成 20 年度一般会計：83 兆 613 億円)。

定員は約 5,500 名 (最も少数な省の 1 つ)。うち、本省勤務は約 2,200 人。在外勤務は約 3,300 人。

124 名の大使が 117 の大使館と 7 つの代表部 (EU など) に、65 名の総領事が 65 の総領事館に赴任中。

大使館は、滞在する国の政府と政治・経済などの問題について交渉にあたる。領事館や領事部は、滞在する国の在留邦人の保護と支援にあたる。

☆ 中東アフリカ局は、中東地域とアフリカ地域の 67 か国を担当している。

しかし、中東・北アフリカとサハラ砂漠以南のアフリカとの間には、文化・社会面など大きな相違があるため、2001 年からはサハラ砂漠以南のアフリカ 48 か国についてはアフリカ審議官組織が担当している。

☆ 中東・北アフリカの 20 か国とパレスチナを、中東第一課と中東第二課が担当している。

☆ 中東地域と日本の役割

中東は、世界の主要なエネルギー供給地 (世界の石油輸出の約 47%、日本原油輸入の約 86% : 2002 年) として重要な地位を占めている。

他方、この地域には、アラブ・イスラエル間の対立に起因する中東問題や、アフガニスタン及びイラクの復興の他、多くの問題がある。

この地域の平和と安全のために日本が積極的な役割をはたすこと



は、日本のみではなく、世界全体の利益につながる。日本は同地域の大多数の国と友好関係を保ち、これらの国々との間で経済・技術協力、人物・文化交流を進めるとともに、アラブ・イスラエル紛争の平和的解決に積極的役割を果たすなど、幅広い外交を展開している。

2. 第二次世界大戦（1939～45）後の中東の動向

- ☆ 中東の土地は、第一次世界大戦後から第二次世界大戦前に列強諸国（イギリス、フランス、ベルギー、イタリアなど）により植民地化された。しかし、第二次世界大戦後の世界情勢に激変が起きた。この地域の国々が民族自決運動をくり広げ、植民地から次ぎ次ぎと独立した。また、多くの国では革命により王制から共和制へと移っていった。更に、ユダヤ人により 1948 年にイスラエルが建国され、第 1 次中東戦争（アラブ・イスラエル戦争）が勃発した。
- ☆ 第二次世界大戦後、ソ連が台頭して共産主義勢力が拡大していった。徐々に、旧列強諸国の資本主義とソ連の共産主義の対立が大きくなり、東西陣営の対立関係が生れて冷戦が始まった。
- ☆ 1970 年代を境にエネルギー資源が石炭から石油へと変化した。それに伴い、石油の埋蔵地である中東諸国が世界的に注目を浴びるようになった。石油資源獲得競争が激化し、中東諸国を自分たちの方へ引き入れようとする動きが起きた。
- ☆ 国際石油企業が巨大な利益を得るようになるにつれ、中東の国々は自分たちがもっと利益を得てもいいのではないかとの考えから資源ナショナリズムが高まり、資源を国有化する動きが生れた。また、産油諸国の間に連帯して石油資源を戦略的に使おうという動きが出てきた（1960 年 OPEC 設立、1968 年 OAPEC 設立）。アラブ・イスラエル戦争に関連してアラブ産油諸国（OAPEC）が自分たちを支持しない国には石油を輸出しないという戦略を取ることににより、1973 年に第一次石油ショックが起こった。西側の一員である日本もそれに巻き込まれたが、田中角栄総理の対応や三木武夫副総理の中東ミッションなどにより、我が国への石油供給は確保された。
- ☆ 1970 年代後半から、共産主義体制によるソ連の政治・経済運営がうまく行かなくなり、世界での影響力にかげりが出てきた。ソ連の衰退は、ソ連に支援されていた国々の民族解放運動の衰退につながり、中東の国々の間でも他国との連帯よりも国益優先（National State）の動きが出てきた。
- ☆ ソ連の衰退により、米ソの 2 超大国から米国一極へとパワー・バランスが変化した。同時に、アメリカ一国による世界支配に対する反発が起き、中東を中心に国境紛争や地域紛争の激化に繋がった。



3. 垣間見た我が国の中東政策の裏側（塩尻大使がかかわってこられた事柄を中心に）

☆ドバイ日航機ハイジャック事件（1973 年 7 月）

1973 年 7 月 20 日、パリ発アンカレジ経由東京行き JL404（ボーイング 747：乗客 123、乗員 22）がハイジャックされ、犯人の丸岡修ら 5 名（日本赤軍+PFLP）が 40 億円の身代金と 2 名のメンバー釈放を要求する事件があった。

最終的には犠牲者もなく問題は解決したが、人質を乗せたハイジャック機が UAE のドバイ空港に立ち寄った際、当時ムハンマド・ラーシド UAE 国防相（現ドバイ首長、UAE 副大統領）との電話交渉に当たった田中角栄総理の通訳として関わった。人命に関わる緊迫した雰囲気の中で、先方は日本の総理大臣自身がアラビア語で応答していると思っていたようである。

☆第 1 次石油危機（1973 年 10 月）と日本の対応

1973 年 10 月 6 日に第 4 次中東戦争が勃発し、10 月 17 日にアラブ産油諸国（OAPEC）は石油戦略を発動して非友好国への石油供給を削減すると発表した。非友好国に分類されていた日本は、石油供給が断たれる懸念から国内はパニック状態となった。

11 月 16 日に二階堂官房長官が「武力による領土の獲得に反対。安保理決議 242 の早期完全実施を希望。パレスチナ人自治権承認総会決議を支持」とのアラブ寄りの談話を出したが、それでは不十分との見方もあった。国内情勢やアラブ側の反応等を見極めて、11 月 22 日、二階堂官房長官は、前回の談話

内容に加えて (1) イスラエルの占領を遺憾 (deplore) とし、(2) 占領地からの撤退を要求し、(3) 今後の情勢の推移如何によってはイスラエルに対する立場を再検討する旨の更にアラブ寄りの談話を発表した。この発表に当たっては、急遽来日した当時のキッシンジャー国務長官が田中角栄総理と会談してアメリカ側との調整が行われた。日本の立場の微妙さを示す一例である。

★三木特使の中東派遣 (1973 年 12 月)

二階堂官房長官談話で日本のアラブ寄り立場を明らかにした後も、アラブ側の対日石油供給削減政策は継続されたままであったので、11 月 28 日に田中角栄総理は、三木武夫副総理・環境庁長官に総理特使としてアラブ主要諸国を訪問し、日本の苦境についてアラブ側の理解を求めるよう要請した。

外務省担当課の一員として 10 日余りの期間で特別機の手配や総理親書のアラビア語訳などの奔走作業に従事した後、一行の出発直前になって三木特使の主任通訳として同行するよう指示された。

三木特使は 12 月 10 日から 28 日までの日程でサウジアラビア、UAE などアラブ主要産油諸国とエジプト、シリア、イランの首脳に対して石油の安定供給が日本にとって如何に重要であることを説明し、理解を求めた。中東諸国における親日感にも助けられて、三木特使の中東訪問中にアラブ側による対日石油供給削減措置は撤廃され、危機を乗り越えた。

★アラファト訪日 (1981 年 10 月) とファハド提案

アラファト PLO 議長が初めて訪日した際に、受け入れ作業と当時の園田外相会談のアラビア語通訳を担当した。外相会談の数日前にサウジアラビアのファハド殿下 (当時、後に国王) が間接的にせよ初めてアラブ側がイスラエルの生存権を認めた中東和平案を発表して注目されていた。その和平案についてアラファト議長が外相会談の中で話した本音の感想を園田外相が国会答弁で披瀝したことから、アラファト議長の政治姿勢が変わったとして国際的な波紋が起きた。最終的にはアラファト議長のその発言はなかったものとして処理され、通訳のミスということで収まった。

★カイロ教育文化センター (通称: カイロ・オペラハウス) の柿落とし (1988 年 8 月)

エジプト在勤中、当時としては例外的に多額 (65 億円) の文化無償資金協力によるカイロの教育文化センターの建設に関わった。1988 年夏の柿落としに日本から花火と歌舞伎 (出し物は俊寛、藤娘) を招聘した。特に中東・北アフリカで初めての歌舞伎公演は、エジプトの人々に大きな文化的衝撃を与えた。

★キルギス日本人誘拐事件 (1999 年 8 月～10 月)

1999 年 8 月 23 日に JICA から派遣されていた日本人専門家 4 名と現地人通訳がキルギスでウズベキスタン・イスラム運動 (UIM) の一団によって誘拐された。外務省はキルギスに現地対策本部を設置して対応する一方、たまたま中央アジアに出張中であった当時の武見敬三外務政務次官は隣国のタジキスタンに赴いて現地拠点を立ち上げて側面支援に当たった。武見政務次官に同行していた私も、中山恭子在ウズベキスタン大使らと共にウズベキスタン、タジキスタン両国の大統領、タジキスタンのヌーリ・サイド国民和解評議会議長やジャーエフ非常事態相等の有力者に人質の無事解放を強く働きかけた。その影響もあって、2 ヶ月後の 10 月 25 日に全員無事に解放された。

★対リビア国連経済制裁の解除 (2003 年 9 月) と大量破壊兵器計画の放棄 (2003 年 12 月 19 日)

特命全権大使としてリビアに着任してから 3 か月目に国連による対リビア経済制裁が正式に解除され、更に、その 3 か月後にリビアが「大量破壊兵器計画を放棄する」旨世界に向けて宣言した。それにより、リビアは国際社会復帰に復帰し、欧米諸国との関係改善への道を歩み始めた。核兵器保有が疑われ、「テロ支援国」と非難されていたリビアが大変身する時期に現地に居合わせることになった。

「質疑応答」

1) 中東、近東、中近東とはイギリスから見ての地域と聞いた。中東とはどの国々を指すのか?

A. イギリスが使い始めた呼称のようであるが、今は、近東 (Near East) や中近東 (Middle and Near East) はあまり使われなくなっている。中東 (Middle East) が一般的であるが、厳密にどの範囲を中東と言うかは国によって異なっている。最近では、同質性が強い北アフリカのアラブ諸国を含めた地域についてアメリカが使い始めた Middle East and North Africa (MENA: 中東・北アフリカ) が一般的になりつつある。

2) リビアのカダフィ大佐の突然の方針変化はなぜ?

A. リビアは 2003 年 12 月に大量破壊兵器計画の放棄を発表したが、その背景は、カダフィがやっとなりの世

界の変化を認識したことによるようである。1992年から国連の経済制裁を受けて、インフラの整備が停滞するなどにより国内が疲弊した。諸外国との関係が良くないと、国内をうまく治められないと判断して、欧米諸国との関係改善に向けて舵を切ったと思われる。2006年5月にアメリカは「リビアをテロ支援国リストから削除する」と発表し、正式な国交再開となった。



3) カダフィはアフリカ諸国に資金を出しているようだが。

- A. カダフィは、欧米諸国と対等にわたり合うためにはアフリカがまとまる必要があるとして、United States of Africa (USA) を作ろうとしている。この構想への支持を得る目的もあって、リビアは石油から得た資金によりアフリカ諸国を支援している。殆どのアフリカ諸国は援助を期待してリビアに大使館を置いているが、このカダフィの援助が返って紛争や問題を助長する可能性もある。

4) カダフィの後継者は誰だと見なされているか？

- A. カダフィには先妻との間に長男が居るが、現夫人との間の次男セイフ・アル・イスラームが外国の会議などによく出席し、欧米のメディアへの露出が多いため、欧米では彼が後継者ではないかと思われているようである。彼の存在は父親のカダフィが居てこそという側面もあるので、カダフィ亡き後はどうなるかは分からない。

5) サウジアラビアでは、外国人が大勢働いており、決まった場所に固まって住んでいたが。

- A. コンパウンドといって壁で囲んだ区画内で外国人だけで暮らしているところもある。もともとは外国の石油会社の職員の住居方法だった。サウジアラビアでは外国人といえどもイスラムの戒律に従わなければならないとされているが、国内の開発には外国人の協力を得なければならない。その折り合いをつける方法の一つがコンパウンド方式である。サウジアラビア以外でもこの方式が見られる。

6) 日本からの海外支援について。資金はどのように流れ、使われているのだろうか？

- A. 税金を使った援助金が本当に必要な所に届いているかどうかはよく問題になるし、その評価をする必要がある。しかし、支援を必要とするのは体制や制度が十分に整っておらず、人びとの意識も低い国々が多い。直ぐに十分な成果が出ないからと言って見捨てることはできず、必要とする人びとがいる限り、支援を続けていかなければならないと思う。

7) 文化交流を盛んにするには？

- A. 外務省としては、国際交流基金や在外公館を通して文化交流を行っている。文化交流は結局のところ人の交流であり、人の交流が国と国との交流の源であると考えている。民間の方からアイデアを頂いてそれに支援するのが望ましいと思われる。

8) リビアの正式な名称は？

- A. リビアは1969年9月の無血クーデター後、現在までカダフィが実権を握っている。現在の国名は日本では「リビア・アラブ社会主義人民ジャマーヒーリーヤ国」と訳されている。独自の「第三世界理論」に基づく統治体制のリビアには、政府も議会も内閣もないとされている。また、一般的な意味での国家元首は存在せず、カダフィは「革命の指導者」である。

以上

長身でいかにも大使という雰囲気の方ですが、話し出されると笑顔とユーモアに満ちて、むづかしい話の中でも度々大きな笑いの渦が広がりました。「役人はサービス業」と再三おっしゃるように、たいへん気さくなお人柄でいらっしやいました。質疑応答の時間は、大変熱のこもったものであり、出席者の中東への関心の深さを感じられました。距離的に離れていること、宗教・習慣の面などからか、いまだ馴染みが深いとはいえませんが、もっとお互いに知り合う必要があると痛感しました。

(国際理解講座委員会担当副会長 高井光子)

2009 年度第 3 回国際理解講演会

「すべての人に食べ物を」

全ての人のためのフードバンク

Food Banking for all people

講師：チャールズ・マクジルトン氏 (Mr. Charles E. McJilton)

「セカンド・ハーベスト・ジャパン」創設者、現理事長

日時：2010 年 1 月 28 日（木）午後 6 時 30 分～8 時 30 分

会場：港区立生涯学習センター304 号室

アメリカ人チャールズ・マクジルトンさんをお迎えして、日本語でお話をさせていただきました。「すべての人に食べ物を」という永遠の人類の課題を、どうすれば解決することが出来るだろうかと考え、行動に移し、その活動の輪を広げておられるパワフルな生き方は、大きな感動と刺激の波となって出席者の胸に伝わってきました。

フード・バンクとは、「もったいない」を「ありがとう」に変える活動

飽食ニッポンでは、品質や安全性に問題はないが、メーカーなどの定める「販売期限」が迫っている、ラベルの印刷がずれた、輸送中に段ボールの外箱がつぶれたなどの理由で廃棄されてしまう食品ロスが、ざっと 1 千万の人を 1 年間養える量といわれる。一方、経済的な理由などから、安全で栄養のある食べ物を 1 日 3 食きちんととれない人は日本に何十万人もいるといわれる。

セカンド・ハーベスト・ジャパン (2HJ) は、企業のそれら廃棄される運命の「もったいない」食品を無償で引き取り、あるいはまた、家庭で使われずに余っている食べ物を「フード・ドライブ」として学校や職場に持ち寄せられた食料を引き取って、2HJ のスタッフやボランティアが、無料で児童養護施設や母子支援施設などへ運び、また難民や 1 人暮らしのお年寄りや路上生活者らを支援する団体へと運ぶ活動をしている。受け取るのは「ありがとう」の笑顔だけである。

企業の側は信用できる団体だと確信できた上で、2HJ との間で「寄贈食品を転売しない、品質管理を徹底する」といった同意書を交わし、協力関係を結ぶ。今、定期的に寄付をする企業は 60 社にまでなった。運営は寄付によって賄っている。40 年前に米国で始まったフード・バンク活動が、日本でも根を張り広まりつつあるといえよう。

講師プロフィール

1963 年 アメリカミネソタ州生れ。大家族の中で空腹の幼少時代を過ごす。16 歳でアルコールや薬物依存に陥るが、強い意志で立ち直る。
1982 年 海軍に入隊 1984 年 日本に派遣され、初めて日本を知る
1986 年 ミネソタ大学入学
1991 年 上智大学の留学生として再び来日。大学で「東アジアの安全保障 政策」を学びながら、東京の山谷にて修道士と共に生活を始める
1997 年～98 年 野宿者に混じりテント生活を送る。
2000 年 フード・バンク活動の代表になる。
2002 年 日米のフード・バンクを比較・研究するために上智大大学院にて学ぶ。特定非営利活動法人認定を受け、「セカンド・ハーベスト・ジャパン」創設。



チャールズさんは、講演会の前半は2HJが登場するドキュメンタリー番組「ガイアの夜明け」を紹介し、後半はパワーポイントを使って、わかりやすく、力強く説明して下さいました。

まず初めに、2007年3月27日放送のドキュメンタリー番組で、参加者の心ががちりつかんだ。この番組前半は、日本のコンビニなどでの、消費期限切れの膨大な食品の廃棄されていく日本の現状と、それを改革しようとする試みが映し出される。おなじみのコンビニのお弁当が消費期限の切れる前に、貧しい人のために300円の定食をだしているNPOの食堂に寄付されている素晴らしい光景が紹介された。

「そんなことが出来るのだ」と感心しつつ見つめながら、一方では、「大規模での実行は難しいのではないか」という印象を受けていた。そのとたん、2HJの登場だ。

チャールズさん達の2HJは、日本で最初の「フード・バンク」のシステムを使ったグループである。



「セカンド・ハーベスト」とは「二度目の収穫」という意味である。

食品メーカーや大型小売店などが、包装の破れた商品といった、食品自体に問題はないが、もう商品として販売できないため、多額の経費をかけて、廃棄していたものを、セカンド・ハーベスト・ジャパンが引き取り、それを経済的に貧しくて必要としている人々に、適切に配分するという仕組みである。ドキュメンタリーの後半では、チャールズさんたちがどのように食品メーカーとの協力関係と、信頼関係を築いていく過程が映し出された。また、反対側で贈り物を受け取る施設の方々の感謝の笑顔と、子どもたちの嬉しそうにはしゃぐ顔を見ると心が熱くなる。

このフード・バンクというシステムは「誰もが損しないシステム」だ、と強力に訴えてくる。企業やそこで働く人々、2HJ、食料品を受け取る人々、ボランティアで参加する人、誰もが皆が得るものは多大で、そして皆さんが幸せそう。後にチャールズさんのおっしゃった、「人間関係、信頼関係を築くことが何よりも（寄付金よりも！）大切なのだ。」とおっしゃることに繋がる。



チャールズさんの情熱が、いかに彼の原点の信念と、過去のいろいろな経験から生み出され、どんどん熱く大きく育って、そして日本初のFood Safety Net（毎日の食事という、人間にとって最も基本的な権利である生存権の保障を脅かされる人々のために、食を確保する事）を生み出したかを知ることが出来たと思う。是非2HJのホームページをご覧になっていただき、もっと詳しく知って頂きたい。

チャールズさんが講演会で引用したキング牧師の言葉を最後に記したいと思う。

「私たちがなければ誰がやるのか。今でなければいつやるのか。」

追記：当日参加者の皆様に、フード・ドライブとして持ち寄ってくださった食料品と参加者からの寄付金(5千円)は、2HJにお送りしました。ご協力ありがとうございました。

(国際理解講座委員会委員長 アカーマン京子)

テーマ：日本の文化外交とソフトパワー

Theme : Japan's Public Diplomacy and Soft Power

講師：門司健次郎氏



外務省広報文化交流部長 前駐イラク大使

2010年2月9日(火) 午後2時30分～4時00分

会場：国際文化会館

ディプロマツツ・レクチャーは、在京の外国大使および大使館員の方々を対象にして、日本をよりよくご理解いただくためのテーマについての英語による講演会で、年に1回開催されています。

今回は、前駐イラク大使で、外務省広報文化交流部長の門司健次郎氏を講師にお迎えいたしました。12名の大使を含む42名の外交官のご出席をいただきました。

「国際社会の中で、日本の存在感が薄れ、日本への関心が全般に下降しつつある中、文化外交にさらに力を入れるべき時期なのに残念ながら、予算は年々削られている。

しかし、厳しい状況の中ながらも、ソフトパワーを有効に利用して文化外交を展開している。ソフトパワーとは何か？人によって様々な定義があり、アニメやマンガのみをソフトパワーと考える人もいるが、私自身はもっと広く捕らえている。たとえば日本語の「おもてなし」や「もったいない」を広めることで、世界の環境保全や高齢化への対応に貢献できると考える。」

上記のような内容のお話を、熱く語っていただきました。

また、イラクで撮られた写真、文化外交の一つ「かわいい大使」の世界各地での活動、そして「酒サムライ」として海外で活動されているご様子など、ビジュアルでも楽しく紹介されました。文化外交を盛んにするために、ますますのご活躍をお祈りしたいと思います。

(学術文化委員会担当常任理事 宮下ゆかり)



* * * * *

[2010年 関東ブロックユネスコ活動研究会 in 東京] のお知らせ

テーマ：2010 ユネスコ新世紀 ～環境・科学の視点から地域ユネスコ活動を～

日時：9月4日(土)午後1時から～5日(日)午前中 (全体会、交流会、分科会など)

会場：東京都渋谷区の青山学院大学

主催：(社)日本ユネスコ協会連盟と東京都ユネスコ協会連絡協議会(都ユ連)

詳細は4月中に確定し、5月には各ユネスコ協会宛に開催要項が届く予定です。

都ユ連が主催者ですので、港ユネスコ協会はいろいろな面での協力が期待されています。

「ブラジルの家庭料理」

日時：2010年1月30日（土）12：00～15：30

会場：港区立男女平等参画センター料理室

講師： 風間クララ洋子さん 料理研究会会員、ラテンアメリカ文化交流会会員

マルティンス・ヴァレスカさん 料理研究会会員



メニュー：

丸ごとかぼちゃのえびソース入り

ブラジリアンサラダ

ガーリックライス

ココナッツプディング

ブラジルコーヒー



日本と地球の反対側にあるブラジルは、南米大陸のおよそ半分を占める広大な国で、面積は日本のおよそ 22 倍。まずはブラジルの地図をもとに、風間さんからブラジルの食文化のお話をお伺いしました。

広大な土地に世界中の民族が集結したブラジルでは、民族・地域・気候の違いからブラジル料理の多様性が生み出され、食文化は各地方によって異なるそうです。日本でブラジル料理といえば、シュラスコやポン・デ・ケージョ、また健康食としてガラナやアサイーなどが有名ですが、ブラジルの食文化にも日本の影響があり、お寿司や焼きそばが大人気。シュラスコのお店よりもお寿司屋さんのほうが多い地域もあるそうです。

そんな多様性のあるブラジル料理の中でも、今回はブラジルの代表的な食材を使ったお料理をご紹介します。

「丸ごとかぼちゃのえびソース入り」は、ホームパーティでよく作られるメニューとのことで、とっても華やかなお料理でした。えびは殻も捨てることなく丸ごと使い、ブラジルの「食材を大切に使う」文化を学び、とても参考になりました。日本では珍しいブラジルのチリを用意して下さり、皆さん興味深く調理されていました。



「ブラジリアンサラダ」は、今回のために、特別に先生がレシピを考案して下さりました。ブラジルマンゴーを使い、トロピカルフルーツ豊富なブラジルのイメージにぴったりの鮮やかなサラダでした。

「ガーリックライス」は、お米をザルで洗い、炒めてから炊くというブラジル式のお米の炊き方を教わりました。

デザートは、葛とココナッツを使った「ココナッツプディング」と「ブラジルコーヒー」です。海岸近くにあるココナッツを使ったお料理は、ブラジルの庶民的料理としてよく使われるそうです。

そして、最後に「カシャサ」というサトウキビからできたブラジルのお酒でマルティンスさんが美味しいカクテルを作って下さりました。40度の強いお酒ですが、ライムと氷でうすめたとっても美味しいカクテルで、「サウージ！」とポルトガル語で乾杯し、美味しくできたブラジル料理とともにいただきました。

皆さんから「とっても美味しい」、「ブラジル料理のイメージがかわりました」との声をいただき、あっという間に楽しい時間が過ぎました。

ブラジルの食文化を丁寧に教えて下さった風間さんとマルティンスさん、そして参加して下さいました皆様、どうもありがとうございました。

(世界の料理委員会副委員長 山本由美)

2010年 新年懇親会

日時：2010年1月17日（日）12：00～15：00

会場：中華料理「北京」（御殿山カーデンホテルラフォーレ東京）

毎年恒例の新年懇親会が、お洒落なホテルで開催され、会員とご家族総勢 39 名の参加をいただきました。4 つのテーブルに籤引きに従って着席し、定刻どおりに始まりました。

まず、三輪公忠会長から下記のご挨拶をいただきました。



皆様新年明けましておめでとうございます。皆様のお元気そうなお姿がまぶしく、嬉しいかぎりです。

さて本年は港ユネスコ協会発足から 30 年目の年になります。創立発会式がありましたのは、1981 年 10 月 17 日でしたので、本年 10 月 17 日が 30 年目になるわけです。10 周年、20 周年、25 周年とお祝いの行事を重ねてきました。

記念誌で確かめましたら、1982 年 10 月 20 日の創立 1 周年記念には、総会と記念行事が丹下健三会長のもとで、日本赤十字社の大ホールを会場にして開かれています。ハーヴァード大学のエズラ・ヴォーゲル教授が「国際秩序と日本の役割」と題して、記念講演をしてくださいました。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と呼ばれた時代のことでした。

それから 30 年近く、日本は経済大国としてはついに 1 番にはなれませんでした。

しかし、2 番として、世界の平和に貢献してきました。そして、本年中にも 2 番の位置を中国に譲りわたすことになっています。そんな年にあたる本年、創立 30 年目に入る我々の港ユネスコ協会は、これまでの数々の輝かしい業績の上に立って、会員の皆様方の豊かな創造力で、平和の秩序の構築に向けて、さらなる貢献をして行こうではありませんか。

会長の新年のお祝いと力強い激励のご挨拶の後、松本洋副会長の「今年も楽しく、明るくやりましょう」という心強い乾杯の音頭で饗宴がスタートしました。美味しい北京料理に舌鼓を打ちつつ、会話も弾みました。全員が簡単な自己紹介を行い、お互いを知るいい機会となりました。



食事が一段落したところで、清水軍治副会長の素晴らしいアコーディオン独奏と独唱を楽しみました。

続いて全員でアコーディオンに合わせて懐かしい童謡と唱歌の数々を元気よく歌いました。歌うにつれて皆の顔が輝きます。

清水さんのユーモア溢れるトークによって雰囲気は一段と盛り上がり、会員どうしの一体感が一層深まり、明日へのエネルギーをいただいたと思います。

最後のイベントはプレゼントの抽選。当たった人、当たらず人、悲喜こもごものひと時となり、当選した人たちの喜びの音が響きました。

閉会に際して、中川統夫副会長から「皆様のご健康と今年のご活躍を祈念します。そして、港ユネスコ協会の活動への積極的な協力と参加をお願いします」との挨拶がありました。

年の初めを寿ぐ集まりは、心身ともに満たされて、盛会裏に無事終了しました。

（語学研修委員会担当常任理事 友金守）



《寄稿》 ユネスコの世界遺産とグルジア

理事 加固寛子

グルジアにはユネスコの世界文化遺産3カ所と無形文化遺産ひとつがある。

【文化遺産】

(1) バグラティ大聖堂(1003年)とゲラティ修道院(1130年)

グルジア西部のクタイシにある。12世紀から13世紀に賭けてのグルジアの最盛期には、学問の一大中心地であり、芸術面でも細密画入りの書物やイコンが作られていた。建物の外壁は見事なレリーフで飾られ、内部は壁画に書かれた場面や歴史的人物の絵で埋め尽くされていたが、1691年オスマン帝国の攻撃を受け大きな被害をこうむった。1990年ころ修道士たちが戻ってきて、部分的に残された修道院で活動を続けている。両遺跡ともに嘗々として修復工事が続けられているが、「日暮れて道遠し」の感は否めない。この遺跡だけでなくグルジアの遺跡はギリシア、ローマ、ペルシア、モンゴルなどの東西の列強による侵略の結果、破壊された物が多い。

(2) ムツヘタの歴史地区

ムツヘタは、首都トビリシから北西へ約20キロ、紀元前5世紀から紀元前4世紀までグルジア東部にあったイベリア王国の首都として栄えた。ここにはグルジア人をキリスト教に改宗させた聖女ニノが十字架を立てさせた聖地に建立されたというジュワリ聖堂がある。327年ごろイベリア王国ではキリスト教を国教と定めた。キリスト教の国教化ではアルメニアに次いで世界で2番目のことであった。この地には11世紀建立のスヴェティツホヴェリ大聖堂がある。ここにはグルジア正教会総主教座がおかれ、ムツヘタは現在もグルジア人の信仰の中心地である。毎年10月14日はムツヘタの祝日で、スヴェティツホヴェリ祭りを祝う信者たちが集まってくる。

(3) ウシュグリの塔(12世紀)

グルジアの山岳地帯には、あちこちにいろいろのスタイルの塔がある。村のどの家にもあるので、場所によっては村全体が塔のかたまりのように見えることもある。その中でも有名なのがウシュグリの塔である。現在でも交通の便の悪い(車かヘリコプターを利用)、グルジア北西部の険しい山岳地帯スヴァネティ地方にある。石で出来た塔状の棟は敵を見張るため、地方の財産を守るため、冬期に備えて食物その他を貯蔵するためとさまざまな用途がある。独特の文化・生活様式が守られている。ヨーロッパ中でも2200メートルの山地に沢山の塔を建て、年間通じて住民が常住しているのは、ここだけである。

【無形文化遺産】

グルジアの多音声合唱は2001年にユネスコの第一回無形文化遺産(伝統芸能、口承文化など形のないものを人類共通の遺産として守り伝える制度)に指定された。グルジアは日本の北海道よりやや小さい小国であるが、その文化の多様性には驚くべきものがある。そのひとつが多音声合唱である。その起原は定かでないほど古く、他国の合唱とは全く異なっている。この合唱は専門家によって歌われるだけでなく、日常生活のあらゆる場面で、教会でも、学校でも、家庭でも一般人によって歌い継がれている。



1970年後半アメリカの宇宙船ボイジャー2号が『20世紀の記憶』としてカラヤン指揮の「ベートーベン交響曲第九番」、ビートルズ・ナンバーなどと一緒に宇宙へ持って行ったレコードの中に「グルジア民謡」も入っていたことで、その存在が外国でも知られるようになった。

なお、グルジア民謡と同様に日本の能楽、人形浄瑠璃、歌舞伎もユネスコの無形文化遺産に指定されている。

(当協会設立メンバーのお1人 [元国際文化会館理事長特別補佐]。日本グルジア友の会会長)



ユネスコ世界寺子屋運動

どうして必要なの?

子どもたちや大人が「**学びの場=寺子屋**」で読み書きや計算を学べるように、教育の機会を提供する運動です。**世界の成人6人に1人が非識字者**です。学校に行けない子どもが7,500万人。学校に行けずに大人になり、文字の読み書きができない人が7億7,600万人もいます。そのうち**3分の2は女性**です。

きっかけは**マイケル・ジャクソンさん**。昨年亡くなったジャクソンさんが、1987年に「日本で初公演をするので、ユネスコ活動に役立ててほしい」と、1000万円を超える寄付をしてくれました。これを資金として、日本ユネスコ協会連盟は世界寺子屋運動を始動させました。それから20年間、124万人の人びとに教育や職業訓練の機会を提供してきました。現在は、**全世界の非識字者人口の約70%を抱えるアジア地域**を中心に「世界寺子屋運動」を展開しています。

港ユネスコ協会は、カンボジアの寺子屋に対しての募金活動を展開しています。皆様のご協力をお願いいたします。

(国際理解講座委員会)

NHK 「ためしてガッテン！」に出演して

会員 小松 晴世

昨年（2009年）12月2日放送のNHKためしてガッテン「鍋革命・オリジナル鍋ベスト3」に、「カッテイ流（家庭流）鍋コンテスト」で選ばれ出演しました。



コンテストは全国の応募から書類選考で8組が、都内のキッチンスタジオで小野文恵アナウンサーを司会に、野崎洋光さん等のプロの料理人、ガッテンのプロデューサーが審査員となり、実演のコンテスト・ロケでベスト3が決められました。

私の「山の幸ぶっかけ鍋」は、細麺を盛ったお椀にキノコ主役の野菜だけの素朴な鍋をぶっかけて食べる、祖父が作ってくれた思い出の鍋です。

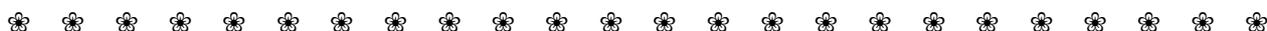
この鍋を、もっと美味しく工夫してスタジオ収録でお披露目するのが出演者の課題で、スタッフの協力のもと、我が家で加熱条件を変えての食べ

比べ等、科学的根拠になる実験を試行錯誤ロケで、レシピ改良に努めました。

今までの自分の味覚によるレシピ作りにはない方法で、私的には非常に興味深いものでした。スタジオ収録では、司会の立川志の輔さん・小野文恵アナウンサーとゲストの榎原郁恵さん・ダチョウ倶楽部・山瀬まみさん達とご一緒でき、スタッフの皆さんを含め全員がアットホームな中、特に印象的だったのは、志の輔師匠が慣れない私達を気遣って話しかけてくださったことです。

撮影場所は、スタジオ収録以外にも我が家に郷里の長野から92歳の叔母や私の姉が駆けつけて祖父の懐かしいキノコ鍋を囲んだ家族団欒の風景や、ダチョウ倶楽部の寺門ジモンさんが訪ねて来られる場面もあり、放送後は親戚中から「見たよ！」という嬉しい電話をいただき話が弾みました。

（小松さんは世界の料理委員会の前委員長です。今後のご活躍をお祈りします。編集者）



日本文化紹介シリーズ「能」の続報

トルコ、イタリアへと海外公演が続く 「イタリアン・レストラン」

当協会主催で昨2009年の5月29日に、麻布区民センターで行った「イタリアン・レストラン」。ご覧になった方々には、あの強烈な印象がまだ脳裏に残っていることでしょう。

この日本文化紹介シリーズ「能」の上演の様子はブレティン117号（2009年9月1日発行）に掲載いたしました。同じブレティン117号に国際理解講演会「魅惑の国～トルコ共和国の歴史と文化」の講演記録も掲載されています。この講演では、2010年が「日本とトルコの友好120周年」の節目の年にあたることになった史実が紹介されました。



日本・トルコ友好120周年の記念行事、「トルコにおける日本年」が今年1月からトルコで始まりまし。大統領が出席された1月4日の記念事業のオープニング式典で、梅若猶彦氏（能楽師、静岡文化芸術大学教授）演出・出演の現代劇「イタリアン・レストラン」が上演されました。

「イタリアン・レストラン」は引続き、アンカラの国立オペラ座、イスタンブール国立劇場などで上演され、大好評を博しました。

また、イタリアでの上演も決まりました。梅若先生からの情報によると、3月13日から、ローマのアゴラ劇場で上演されるそうです。

港区から出発した現代劇「イタリアン・レストラン」がこうして世界を駆けめぐり、国際文化交流の架け橋になるとは、わが港ユネスコ協会にとって大変に喜ばしいことです。この紙上をお借りして、梅若先生のますますのご活躍を祈念いたします。

（事務局長 水野隆）

「釣りの世界へご案内」

日時：2009年12月9日午後6時30分～9時

会場：MUA 事務局

お話：水野 隆 事務局長

今回の講師は、昨2008年夏、MUAの新事務局長に就任して以来、新風を吹き込んで活躍されている水野隆さんにお願ひしました。数号前のブレティン記事で、水野さんが釣りを趣味にしていることが紹介され、ぜひ一度、釣りに関する話を聞かせて欲しいとの会員の要望に応じて頂いたものです。

当日は三輪会長ご夫妻はじめ23名の会員が集まり、MUAの「海の若大将」水野さんの話に聞き入りました。

水野さんの釣り歴は、1980年代にビジネスマンとしてご家族と一緒に過ごしたストックホルム時代に遡るそうです。現地人の同僚が釣りに誘ってくれたので、ご家族と一緒にこれを楽しみ、釣った魚をすぐ燻製処理するのがスウェーデン流と知ったそうです。



帰国後、今度は飲み仲間誘われて三浦半島へ釣りに出かけたのが契機となり、その後、仲間と「月一クラブ」を結成して、今ではひとりでも日本海（直江津、寺泊など）や外房（鹿島灘など）へも足を伸ばして沖釣りを楽しむようになったそうです。

用意周到な水野さんらしく、過去4年間の釣果をまとめた一覧表、拠点としている港町を示した日本地図、それにレジメが配布され、講話中、釣りに使う電動リール付きの竿（カーボン繊維製）、糸、針なども実演入りで、説明して頂きました。季節ごとに変わる釣果、思い出の釣りや魚など、釣りに関する広範なトピックに触れながら、体験談と面白いエピソードが披露されました。

釣果を左右するのは、魚の活性に直結する水温や潮流、それに魚種によっては船上の座席だそうです。釣り船には通常、4～16人程度が同乗し、座席位置は早い順かクジ引きで決めるが、慣れてきてもその日の諸条件からどこが最良の席か判断するのは難しいとのこと。最近の釣り愛好家はネットを利用して当日の天候や波の予測、自分が狙う魚と行こうとしている釣り船の最近の釣況などを事前に見てから、出かけるそうです。

魚の中で、カワハギは「エサ取り名人」と呼ばれるくらい、釣るのが難しい魚で、一旦、エサをくわえた後、口の中で上手に針だけ外してしまうそうです。真鯛は「捨てる場所のない魚」と呼ばれており、心臓や白子は珍重されるし、ウロコもビールのつまみになるとのこと。ヒラメは、イワシ等の生きエサを尾のほうから少しずつ食べていく賢さがあり、これを釣るには「ヒラメ40」という言葉もあるように、じっくり構えて竿を引くのが秘訣だそうです。

ふつうの店には出ていないサワラの刺身や、カワハギの肝、ヒラメのマコなどを楽しめるのも釣りの醍醐味。初心者でも釣り船から、竿などの釣り道具一式を貸してもらえりし、船酔い止めの薬も市販されているので、帽子、カップ、長グツくらい用意すれば、誰でも気楽に釣りを楽しめるそうです。

水野さんの「釣果リスト」を見ると、年間を通して毎月2～3回のペースで釣りに出かけているのが判ります。釣果のうち実績の多い魚は真鯛、ヒラメ、カレイ、イサキなどで、これに加えて、「外道（げどう）」と呼ばれる本命以外の魚（大アジ、イナダ、アイナメ等）も沢山釣れています。これまでに釣り上げた最大の魚は6.3kgもある真鯛だそうです。

臨場感に溢れ、興味尽きない水野さんの話に、参加者からは活発な質問が相次ぎ、楽しい「釣りの世界」へのオリエンテーションとなりました。なお、水野さんのご好意で、参加者の中からクジに当たった佐野さんには、近いうちに釣果がプレゼントされることになりました。佐野さん、おめでとうございます！

（広報ブレティン・インターネット委員会担当常任理事 棚橋征一）

♪♪♪♪♪ 事務局便り ♪♪♪♪♪

【今後の行事予定】（詳細はチラシやホームページで別途ご案内いたします）

- ☆ 4月24日(土) 13:00~14:00 港ユネスコ協会年次総会
14:00~15:30 日本・インドネシア交流の会によるインドネシアの民族舞踊と懇親会

会場は、生涯学習センター101号室です。ご出席をお待ちします。

- ☆ 6月9日(水) 18:30~20:30 新入会員を囲む会 会場：生涯学習センター305号室

~ご寄付ありがとうございました~

2010年1月28日 第3回国際理解講演会会場における募金

フードバンク活動のセカンド・ハーベスト・ジャパンへ

¥5,000

港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL 03(3434)2300 FAX 03(3434)2233

電子メール：minato-unesco@nifty.com ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp/>♣

■編 | 集 | 後 | 記■ ◇★アラブ湾岸から東京を訪れた若い女性。時差ボケで夜明け前に目が覚めたら、ホテルの広い窓の外に雪が舞い始めたので、朝まで飽きずに眺めていたそうです。贅沢な時間の過ごし方ですね。(島田和美) ◇★毎週1回、孫に会いに行くのを楽しみにしている。最近チョコチョコと歩き始めたが、まだ寒い日が多いので、一緒に遊ぶのも殆ど家の中だ。公園の芝の上で遊べる、春よ来い♪ 早く来い♪ の心境だ。(須田康司) ◇★「ユネスコ世界寺子屋運動まなびゲーター」に就任したフリーアナウンサー久保純子さんの講演を聴きに行ったが、まさに適任のお人柄と感じた。是非、この運動のシンボル・キャラクターとして、ユネスコの存在感を高めて頂きたい。(棚橋征一) ◇★花粉症がっらいです。すっきりとしてお花見を迎えられるといいのですが・・・(中前由紀) ◇★この冬はヒラメをガンガン釣ろうと思って専用の竿も購入しましたが、休みと天候がうまく噛み合わず、鹿島灘遠征は3回しか実現できませんでした。でも春になったら日本海のマダイが待っています。一年中何かが釣れるのが沖釣りの楽しさです。(水野隆) ◇★この2年間、和文ブレティン、英文ブレティン共に年4回の発行を目指しました。和文の編集は島田和美さん、中前由紀さん、高井の3人交代で担当しました。英文の方は、棚橋征一さん、水野隆さん、須田康司さんの3人が殆ど総ての記事の翻訳(会長が英語で書かれる巻頭言以外)から編集まで、時間を割いて軌道に乗せて下さいました。この場をかりて皆様にご報告させていただきます。皆様同士の心をつなぐツールとして、更に魅力ある内容にしたいと願っています。ご協力いただける方を常時募集しています。手間のかかる作業ですが、印刷が出来上がってきた時の嬉しさは格別です。ウェブサイトにも、各和文・英文ブレティン全文がカラーで掲載されていますので、こちらもご覧下さい。(高井光子)

港ユネスコ協会ウェブサイト <http://minato-unesco.jp/>

随時更新中！是非、ご覧ください♪